

居合道 だより

第 129 号

目次

- ・はじめに
- ・主な活動・4月5月の予定
- ・会員の声
- ・道場訪問
- ・門人紹介
- ・編集後記



はじめに

例年より少し遅れたが春本番、桜花爛漫の時が来た。

毎年時期を忘れず花を咲かせ、実をつけて次の世代へ命をつないでいく自然の営み。その過程の中で鳥や昆虫たちには蜜を与え、人間には景色を楽しませるといった恩恵を与えてくれる。

小学校の入学式には桜がよく似合う。開花が少し遅れた分、久しぶりに新入生たちは桜吹雪の祝福を受けそうである。

日本人は昔から桜が大好きだ。その豪華絢爛さとあつという間の潔い散り際。一方、椿の花は寒い季節に耐えながら艶やかに咲き、これも潔く、しかし桜花のように花びらの一片ずつではなく、花の姿のままポトリと首から落下する。

河東碧梧桐の俳句『赤い椿白い椿と落ちにけり』。落下の瞬間の二本の線のごとき残像の鮮やかな色彩印象と、未練を残さぬ潔さ。武士に好まれた所以である。千利休も茶室に椿の一輪を好んで挿したとか。そこにいわゆる残心を見出したのであろう。

剣道において、一撃を加えた後の心の構え、弓道においての矢を発した後の反応にこたえる構え、これらを残心という。茶道においては『一期一会』茶の湯がすんだ後の心の構えとか。

いずれも未練や後悔など思い残すことはなく、今出来ることを精一杯やりきることから生じる境地である。

先月の大相撲春場所で、新横綱稀勢の里が左肩付近の大けがを抱えながら見事に新横綱としては22年ぶりの幕の内最高優勝を果たした。

相撲座席の観客もテレビの前の視聴者も多くの人々が感激して涙を流した。

新横綱として春場所に臨み、期待通りに12連勝をした後、13日目に大けがをして救急車で運ばれ、好事魔多しと誰もが休場を予測した。それでもその強行出場であった。

「やれると思ったから、そう決めた以上は力を出し切ってやる。」横綱としての使命感、死力を尽くして責務を果たそうとした姿は風格さえも漂わせていた。

「地位が人を作る」か。

稀勢の里は最後にこうも言った。「自分の力以上のものが出た。見えない力が働いた」と。愚直なほど真面目に土俵に立ち続ける姿。

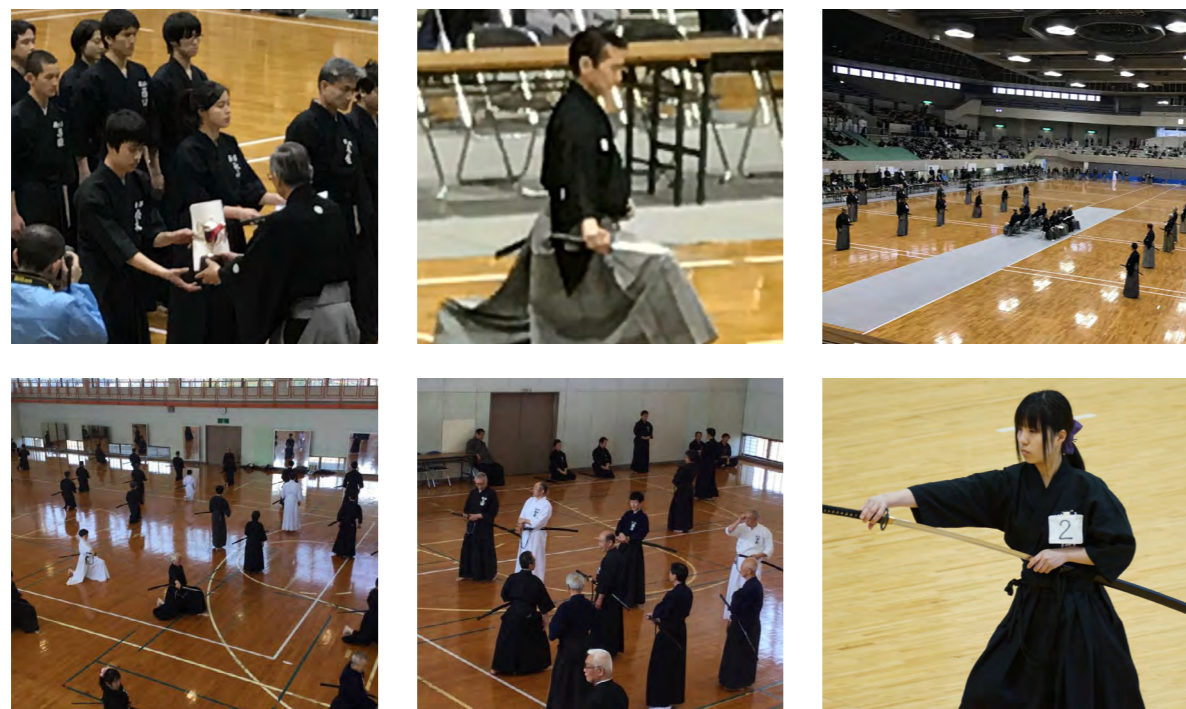
勝負の女神も微笑んだようだ。

主な活動

- 3月11日(土) 第19回 全国居合道七段選手権大会
第43回 北九州居合道大会
・・・北九州市立総合体育館
- 3月19日(日) 福岡県居合道地域稽古会
・・・飯塚市第2体育館
- 3月26日(日) 福岡県居合道段位審査会
・・・福岡武道館

4月・5月の予定

- 4月8日(土) 剣道・居合道・杖道教士称号筆記試験
・・・東京都・神戸市・福岡市
- 4月9日(日) 第47回福岡県剣道連盟武道祭
・・・福岡武道館
- 5月2～5日 第113回全日本剣道演武大会
(火～金) ・・・京都市
- 5月14日(日) 居合道部理事会・総会
・・・クリエイト篠栗



宗像居合道同好会

発会は昭和58年4月、今年で34年を迎えます。結成時は橘菌先生を指導者として宗像地域の剣道修練者を中心としたものでしたが、現在は一般の方が多く、地元となる宗像市・古賀市・福津市等の方々が会員となっておられ、現在会員数は22名で、60歳以上の方が多く平均年齢64歳です。会長は掛水伸一先生です。

練習は、木曜日が定例稽古会で、また希望者を対象として近くの公民館を借りて随時行っております。勤務の都合でこれらの稽古日に参加できなければ各人、市民体育館を利用しての個人練習に励んでいます。

宗像市民体育館	木曜日	19:30 ~ 21:30
大谷公民館	随時日曜日	9:15 ~ 12:00 (希望者)

本会の年間行事

- 4月 宗像大社奉納演武
- 三回の試し斬り(5月竹斬り、7月・10月巻藁斬り)
- 10月 合宿練習会(1泊2日)
- 刀剣鑑賞会(11月)

これ以外には新年会、暑気払い、忘年会等の行事があり、これらの行事を通して会員の親睦を深め、また士気の高揚をはかり、そして居合道のさらなる練成を図っています。

会の目標を 会長の掛水先生に 伺いました。

「60歳前後で入会し経験が10年に満たない人が多い会ですが、本会が稽古で目指しているものは、大会で勝利することや昇段審査に合格するのは勿論ですが、それだけでなく『神様に奉納するに値する技、神前で演武するに値する技を身に付けること』そして、いつかは『60歳過ぎて居合を始め、あのような素晴らしい技を抜くことができるのか』と評されるような稽古を目指したい」



行橋武道館居合道部

行橋武道館居合道部の創設は、園田武光先生と宮本登先生によって創設されました。

園田武光先生は昭和3年2月1日生

教士七段 (H11年7月12日七段、H11年11月26日教士)

宮本登先生は大正13年1月10日生

錬士六段 (H06年7月17日六段、H11年8月04日錬士)

平成21年より園田先生より佐藤清先生が引継ぎを受け、現在に至っております。

<指導者>

故 山下貞利先生が月一回指導に来て頂き、そこで指摘事項を堀江征男先生・園田武光先生が具体的に指導して頂きました。山下先生がお亡くなった後は、堀江先生が指導者として引き続き毎週来て頂いております。

新人者の指導は、私が担当し堀江先生には有段者の指導を頂き、審査対象者はマンツーマンの指導を頂いております。

現在人員は、12月に入部した新人と四段1名・錬士六段2名の4名です。

居合道部事務局の支援により行橋産業祭での演武披露の結果、一名入会を頂きました。

今後も活動は続け、体験希望者にも広く門を開いております。

<稽古場所>

行橋武道館 (1990年秋のとびうめ国体) に新設された所で、総床面積は1282㎡の独立建物で板張りで約15×45Mで剣道コート3面 (但し1面柔道畳が敷かれている) が取れ、前面に鏡 (1.8×1.8mが5枚連続して2ヶ所) 配置された、恵まれた会場です。



行橋武道館居合道部 四段 光永 公一

昭和2年生まれの御歳なんと89歳だそうですが、とてもそのご年齢には見えない光永先生は、居合を始めたのが79歳の頃という (ちょうど10年目)

現役の頃は仕事が多忙で、時間がなかったのですが、学生時代に剣道をやっていたこともあり、興味を持っていたという。

どうしてもやってみたくと決意し、ご自身で行橋市の教育委員会に尋ね、行橋武道館居合道部の佐藤先生に巡り合ったとのこと。

刀の振りも腰が入っていて、落ち着いた堂々たる演武を拝見しました。

今後の目標は健康管理に努め、いつまでも元気に刀を抜くことだそうです。

我々もぜひこのバイタリティを見習わなければ・・・と深く感じました。



吉武 和馬 (東海大学附属福岡高校2年) 初段

私は中学生の頃から剣道をしていました。特に二刀流に大変興味があり、何とか自分なりに納得がいくものにしたいと願っていました。しかし、なかなか、うまくいきません。

そこで、居合を紹介され、平成27年に入会させていただきました。当初は二刀流の技を何とかしたいと思っの居合でしたが、今では私の関心は、居

合に大きく傾いています。これからも、ずっと居合を続けていくつもりですし、出来れば、いつか居合道の奥義の一端でも掴める居合道人になりたいと願って日々、稽古に励んでいます。



編集後記

先日、行橋の佐藤先生のところに取材申し込みをしたところ、「刀の研ぎに興味があるなら少し早く家の方においで」と誘われ、是非に！とお邪魔しました。

刀の研ぎには多くの工程があり、家でなまくら包丁研ぐようなわけには行きません。

粗い砥石で研ぎ、それをついた傷を次に・・・と研ぎを重ね、最後には紙のように薄く削った石を小さくして指で研いで行き、仕上げに超硬度の金属で磨きをかけ、最後には塗装まで施すそうです。

刀の表現に「青黒く」という表現がありますが、これは最後に金属を油に浸し、その油を和紙で漉したものを塗ると写真のように本当に青黒く光り輝きます。

テレビで研いでいるところを見ている程度ではこの真なる作業は絶対に理解できません。それをご趣味でやられている佐藤先生・・・凄すぎる・・・。

刀でお困りの時は佐藤先生に頼ると的確な答えが頂けます。(感謝)



左上から研ぎ終えた刀、砥石色々、紙のように薄く削った砥石、

左下から細かく砕いた砥石、塗装用の油に浸した金属、塗装した刀、向かって右側が青黒い

© 公益社団法人 福岡県剣道連盟・福岡県剣道連盟 居合道部

第129号 平成29年4月1日発行

発行：福岡県剣道連盟居合道部

URL：<http://riai.info/>

発行人：井手友太

〒819-1132 糸島市有田 36 番地 -1

TEL:092-322-0847